



エネルギー層への招待

永田 円了

Energy Consciousness

我々は人を見るとき、どのような視点で見ているのだろうか。名刺の肩書や社会的地位でその人を判断するのか。身なり外見でみるのか。もし相手をもっと違った観点、例えば、その人のもつエネルギー値で、その人間の魅力を判断したらどうなるのか。

あの人と一緒にいると、何か元気になる。彼は頼りがいがある男だ。彼女の魅力は、内からにじみ出る包容力だ。横にいただけで癒される。またその逆に、彼と空気を共用するだけでイライラする。あの女性は美人だが、心は氷のように冷たい、など。

エネルギー値が低くなることを、神道では「穢れ」（けがれ）といい、民俗学では「気枯れ」、エネルギーが枯渇した状態を言う。また「元気」とは、天地間に広がり、万物が生まれ育つ根本となる精気（日本国語大辞典）のこと。私なりにいうと、「元気」とは、エネルギーが元にもどる状態をいう。

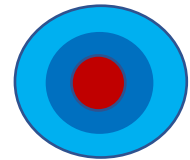
三つの自己

肩書や外見と違って目に見えないエネルギーなるものは、いったいどこに存在するのか。自己の有様を三つに分けてみた；

表層の自己：肩書の自分、人目を気にする自分、金、人脈パワーが財産、管理し管理される自分

深層の自己：天使も悪魔も共存する自分、マザーテレサもヒットラーも同居する自分

エネルギー層の自己：命（いのち）としての自分、使命感をもった自分、対置概念のない世界



その人の表の部分、「表層の自己」は、履歴書に表れるようにコトバにしやすく分かりやすい。またその人の内面、「深層の自己」はその人の隠れた魅力であったり、表とは裏腹な醜い部分であったりする。そして「エネルギー層の自己」とは、人間の中心にあり、その人の尊厳を表すものでもある。もし我々が何かを命かけて行おうとすると、「表層の自己」「深層の自己」などどうでもいい、一番頼りになるのは、「エネルギー層の自己」のパワーである。



エネルギー層と向き合う

次男、洋二郎さんを25歳の若さで失ったノンフィクション作家、柳田邦男氏が当時を語る。次男は言った。「親父は作家だろう、作家だったら世の中のことを他人事のように書くんじゃなくて、自分の中の地獄を書けよ！」

「表層の自己」で満足していた柳田氏に対する、エネルギー層からの強烈なメッセージであった。

それを契機に柳田氏の意識に変化が起きる。自分が変わったな、と思うのは、「自分の感情に素直になったこと。笑いたいときには笑い、泣きたいときは思いっきり泣く」ことができるようになった、と柳田氏。自分の感情を素直に表に出すとき、エネルギー漏れはしない。むしろエンパワーする。もしあの時、息子とエネルギー層で向き合っていたなら、事態は変わっていたかもしれない。

<事例>

高倉健/いつはもらって帰るぜ！

映画「幸福の黄色いハンカチ」/ちやぶ台をひっくり返す

NHK 性の悩み/セックスレス/エネルギー漏れに気づいていない

きわめびと/マニュアル人間/登山中、食料を落とす、どうする

イチロー/引退会見/成功するからやる、ではなく、やってみないからやる

映画「地獄の黙示録」/ベトナムでサーフィン、エネルギー漏れなし

サワコの朝/林修、「過去を今の色に染める」

映画「マイレージマイライフ」/人生も持ち物も軽くして生きる

オバマ広島訪問 2016年/謝罪を求めない憎しみを越えて、

野生動物は恨みをもたない/ヒョウとニシキヘビ

黒澤明と三船敏郎/衝撃の出会い/感情が直に表出すると、

柳田邦男/ころの時代/息子が自殺/自分の地獄を書けよ！

なかにし礼/歌はエネルギー層から生まれる

歌・笹本玲奈 / Someone Like You エネルギー層へ導く人

